

My GEO STORY vol.7

長谷部 武さん
(沼田・テレマークスキー指導員)

定住を決意してこの春から沼田施設を開業する長谷部さんは、浅間の山野に住んでもう20年になる。取材当日もスキー場で群衆の小学生のレッスンで多忙中でしたが、木島平でテレマークスキーの指導員を始めてから30年のレッスンプロで、優しい物腰ながら的確な指導が好評で指名されることも多くなった。趣意に移り住んだのは20年ほど前、父が持っていた山荘を拠点に周囲の山々を滑り生徒が増えた。スキーで知り合った妻とパンとコーヒーの店「六花」を北軽近くに開業すると、以前にキャベツ農家で働いたこともあって地元の知り合いから野菜がいっぱい届いた。たくさんの人に支えられて不自由は感じなかったですね、と話し、夫婦して「ここの自然で、冬が一番きれいで好きです」とおおらかな口調で語る。でも、将来を考えてこの春から沼田施設を開業することになった。2家族が宿泊できるゲストルームを持つ家が完成し、認可も降りて準備に忙しい日々が続いているのかと思えば、本人たちは僕でる様子もなく、まだパンフレットもない(笑)。昨年、地元のことをもっと知ろうと、二人してジオパークガイド講習会に参加して幅を広げた。都会には無い山間のゆったりとした時間の流れが二人にピッタリ合っているようです。

ジオジオ豆知識 vol.7

浅間高原らしい鳥

浅間山麓は、「日本三大野鳥生息地」の一つといわれた昭和初期ほど鳥が多くありませんが、各地で鳥が減った今だからこそ、この地を特徴づける鳥もいます。

コサメビタキという、地味ながら目がパッチリ可愛い小鳥。かつて東京郊外にもいましたが、経済成長の弊で姿を消し、中西留置さんのような昭和の愛鳥家にとっても嘆いておられました。この鳥は、河野林のハルニレなどの横枝に巣を作り、カゲロウなどの水生昆虫が羽化して舞うのを待て捕らえ、ヒナを育てます。なので、湧水が淵の目のように張り巡らされた王領地の森など、浅間山北麓では今もよく見られます。



コサメビタキとウリカエダの花

この鳥は4~5月に南から渡ってきます。日本の初夏は、はるばる東南アジアから渡ってくる個体があるほど、昆虫が爆発的に発生するので、それで子育てをするのです。巣立った若鳥も秋には南へ渡りますが、翌春、生まれ故郷の浅間高原に戻ってきます。

ただ、人の視線をカラスが見ていて巣に気づき、巣を襲うことがあります。カラスが卵やヒナを食べるのは自然なことですが、人がそこに関わらないことが、さらなる自然です。巣を見つけても、チラ見程度にとどめておきましょう。

解説：石塚 敏
(万歳しぜん情報館館長)

3月上旬~4月上旬	ガイド養成講座
4月1日(月)	浅間湖 平成31年度オープン
4月11日(木)	ジオカフェ
5月中旬~6月上旬	浅間湖開湖しゃくなげ園まつり
6月中旬~7月上旬	湯の丸高原つつじ祭り



【ジオカフェ】
1月16日(水) 第2回「お正月とジオパーク」2月7日(木) 第3回「レンジャーが語る! 国立公園とジオパーク」を開催しました。どちらもたくさんの方の交流の場となり、楽しくお話をすることが出来ました。

イベント情報・活動報告



【ジオパークフォーラム】
第3回浅間山北麓ジオパークフォーラムを開催しました。生のガイドのお話や浅間大学の研究発表など内容は盛りだくさんあり、有意義な時間となりました。今後とも頑張っていきます!

発行元：浅間山ジオパーク推進協議会
Mt.Asama Geopark Promotion Council
〒377-1524 群馬県吾妻郡沼田町 434-45
TEL/FAX : 0279-82-5546
URL : www.mtasama.com
E-mail : asama-geo@ebony.plala.or.jp
Facebook : www.facebook.com/asamageopark
制作担当：広報・観光委員会

ガイド案内の受付をしています
「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ジオガイドによる案内(有料)の受付をしています。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。
【料金表：ジオガイド1人あたり】
平日：¥5,000~8,000 ジオガイド1人につき
一日：¥10,000~15,000 15名までガイド可

編集後記
草軽電鉄が出来た当時の記事を書くとき時代の流れは早いと感じ、今だからこそ改めて読めよよかったと思える物もあり、自分たちは何を残していけばいいのだろうかと考えさせられた。



あさまびと

vol.08 2019春号

特集：草軽電鉄で文明開化!



▲ ジオガイドと行く浅間牧場散策 (現在)
ゴールデンウィーク中毎日浅間牧場散策ジオツアーを開催しています。興味のある方は是非参加してみてください。

レンゲツツジが咲き乱れる
浅間牧場 (散策前)



写真提供：高松真氏

【旧草軽電鉄跡地散策ジオツアー】
旧草軽電鉄跡地散策ジオツアーの参加者を募集しています。当時の貴重な話を聞くチャンスです。詳細は中巻をお楽しみください。

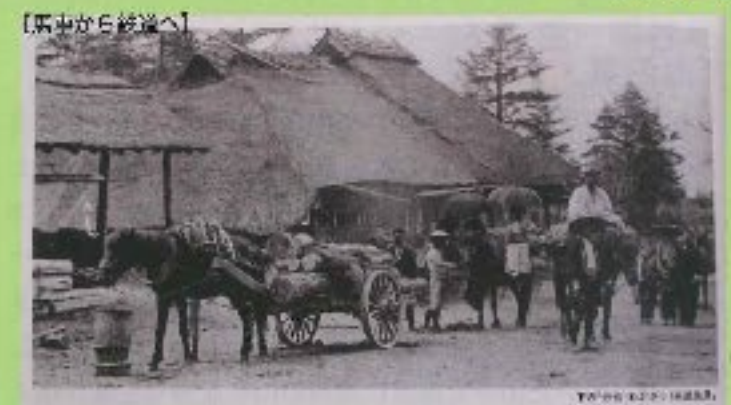
北軽井沢の発展のきっかけとなった場所が浅間牧場です。明治時代に放牧場として開設され、時代とともに馬から牛へと放牧の対象が変わっていききました。大正時代に入ると、草軽鉄道の開通と共にこの地域の開拓が行われ、避暑地となり、大学村が出来ると、観光地化が進んで行くことになりました。レンゲツツジの群生でもあった牧場には観光客がたくさん訪れ、赤い絨毯を楽しむ光景が毎年のようにこの地を賑わしました。現在は残念ながら草軽電鉄は廃線となってしまい、昔の賑わいは名残だけが感じることが出来なくなってしまうのですが、その名残を探し出す、宝探しのよう楽しい方が出来ると思います。

また、この広大な土地と、素晴らしい景色を望むことの出来る浅間牧場は、カラー映画の発祥の地にもなりました。見る場所、見る季節、見る人によってそれぞれの楽しみ方が出来る、まさに一見の価値のある場所を訪れてみませんか。

浅間牧場今昔物語

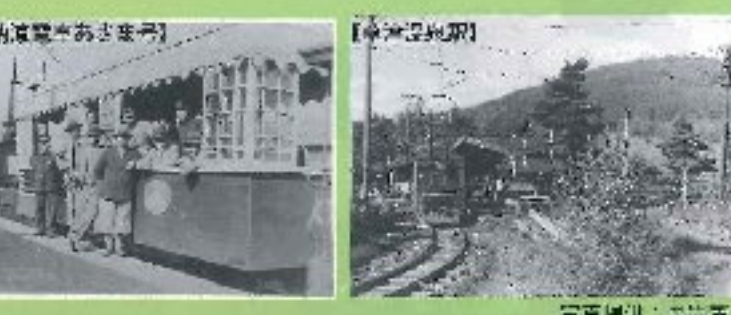
草軽鉄道で文明開化!

開通でここが変わった!



◆**硝黄を運ぶ**◆
白根山周辺の硝黄も戦国時代から知られており、後浜開港の功勞者中津屋半兵衛は白根山の硝黄を使い火薬を製造し、大要砲新書を出版しました。大正になり鉄道が敷かれ、硝黄駅ができるまで硝黄輸送は山道で人力で運ばれてきました。草津温泉まで鉄道が敷かれると、硝黄駅、万原温泉口駅、前山駅、谷所駅から硝黄が輸出されました。硝黄は黄色いダイヤとも言われるようになり、駅には製錬された黄色い硝黄の塊が山積みになり、貨車に積まれて信濃本線の群井沢駅に運ばれ、北信地域の経済を支えました。

◆**高原が観光地に**◆
明治40年、広大な浅間牧場が併して東京の井藤士松木降治らに払い下げられると、草津の旅館と連携して軽便鉄道の建設が着手されています。浅間牧場に咲くレンゲツツジは100万株ともいわれ、シーズンには多くの人々が訪れる観光地になりました。北軽井沢には大正12年に一區村別荘地ができ、昭和2年には大学村が造られて今日の別荘地に育っています。また、大正11年、奇岩鬼押出しは「降着梁」として御井開港が始まりました。広大な浅間牧場は日本で最初のカー映画の舞台になるなど、草軽電車によって広く知れ渡り観光地化が進みました。

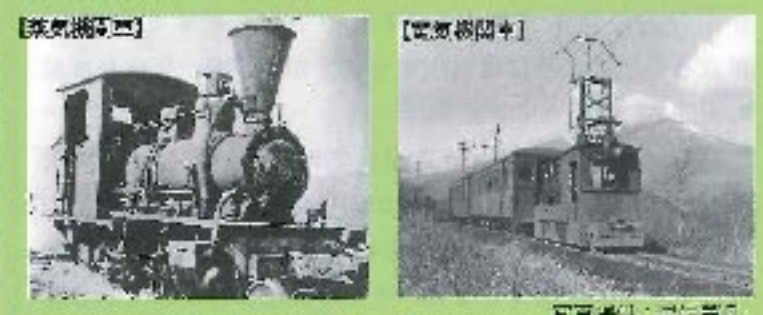


◆**旧態依然の生活が変わる**◆

明治の改革の中で、高崎・横川間は明治13年に鉄道を開通、直江津・群井沢間にも明治21年には鉄道が開通して交通の近代化が進み、明治26年に残りの横川・群井沢間が完成し全線開通すると沿線は大きく変わっていきました。しかし北信地域の僻地として栄えた浅間北麓の村々は、明治の近代化の中で取り残されたように旧態依然の暮らしが続いていました。軽井沢から草津温泉に来るお馬の馬による輸送がかわりに活弁になる程までしたから、大正6年、群井沢からの草軽電車工事が浅間高原の硝黄駅まで開通すると、西信濃に文化や生活の近代化をもたらされるようになりました。

◆**蒸気機関車が来て、電気が来た**◆

大正8年11月7日に石炭を焚いた蒸気機関車ができたての碓氷線(芦生田)にシュッシュッポッポと吼えました。これまで線路が敷かれ終着駅が伸びてきました。そして吾妻川に水力発電所の建設が始まり、その建設資材はこの蒸気機関車が運んできました。大正14年11月今井発電所が完成し、電気が家庭に届けられ、ランプから明るい光の電灯の生活になりました。草軽軽便鉄道もこの電気を使い蒸気機関車が走るようになりました。



◆**浅間山北麓を支え人活躍**◆

浅間山北麓は戦国の武田、真田の時代から南木山と呼ばれ、御林もあり豊かな林や森であり、木材が豊富でした。鉄道が敷かれたことで、この木材が炭、薪、建築資材として硝黄駅や栗平駅から首都圏へ運ばれました。吾妻駅には与志(吉木)林業が横敷止まで軌道を造り、木材を本格的に輸出しました。関東大震災や戦後の復興に寄与しました。そして、北麓地域と他地域を結ぶ唯一の交通でもあり、文豪、温泉客、別荘客と多くの人々がこの地域を訪れました。また、生活物資や文化が入ってきました。北麓の人々も他所へ出かけるために頻りに利用し、修学旅行や日帰り客も見送った地域の大型駅でありました。

～～～草軽鉄道って?～～～

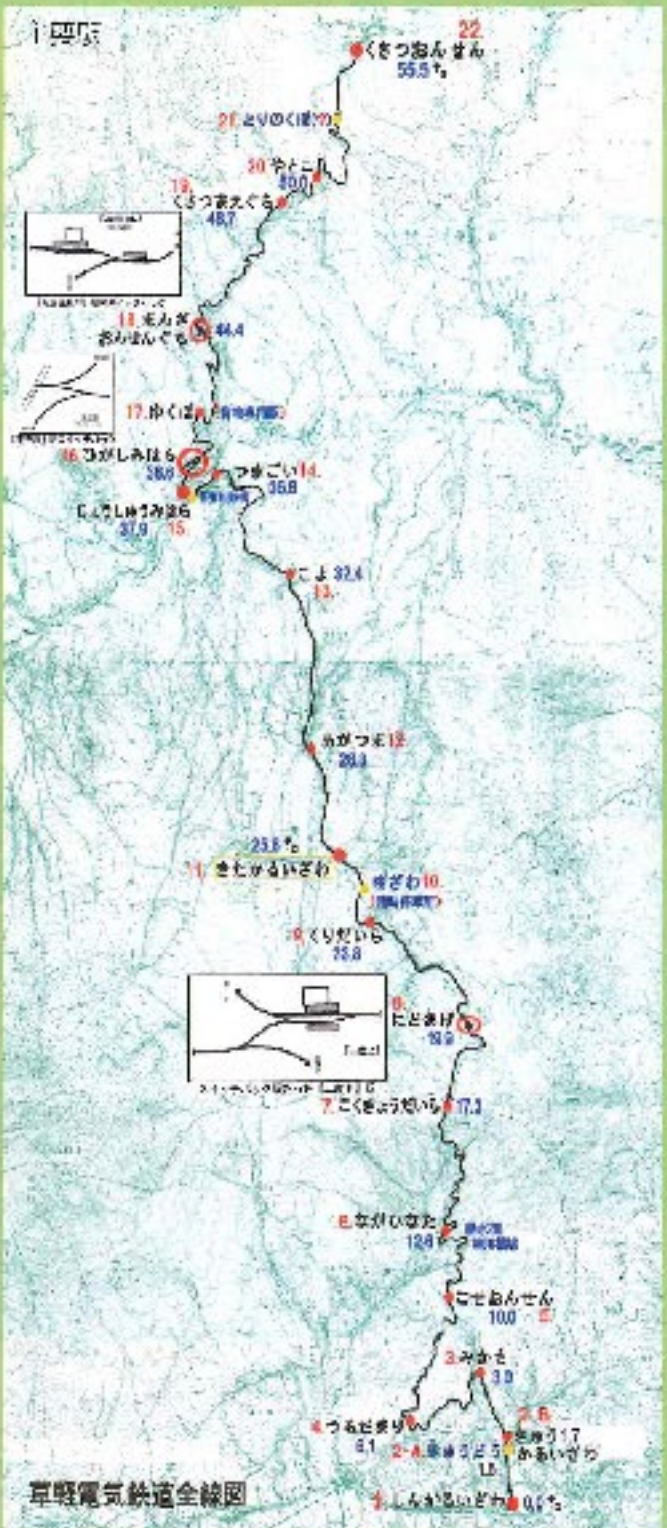


大正2年(1913年)、草津、長野原、硝黄、群井沢を結ぶ沿線の旅客輸送及び物資、木材、薪炭、硝黄等の貨物輸送のため着工された草軽電車は、大正4年、群井沢～小瀬温泉間の約10kmが開通しました。当初、客車・貨物車を引っ張っていたのは小型蒸気機関車でしたが、大正15年蒸気機関車に替わっていききました。電化されていく中で、高く突き出たパンタグラフを持つ「デキ12型」は、「カブトムシ」の愛称で広く鉄道ファンに親しまれ、昭和37年(1962年)廃線されるまでの38年間走り続けました。



大正6年(1917年)小瀬温泉～硝黄間が開通し、その後、硝黄、草津前口と路線は伸びて行き、大正15年草津温泉までの55.5km全線が開通しました。全線開通の駅も徐々に増えて行き、最終的に22の駅が設けられました。ほぼ中心地点に位置する地蔵川停車場は、昭和4年(1928年)この地区に法政大学村が開村されたことに伴い、翌昭和4年～5年に法政大学が全舎を新設、高層し、駅名が北軽井沢と改められ、多くの乗客で賑わいました。和洋折衷で斬新なデザインの正面玄関の間には、法政大学の「H」の文字が大きく並んでいます。当時の全舎を留める唯一の駅舎であることから、巨の有形文化財として一般に開放されています。

明治政府からの本鉄道設置許可書には、時速12.8kmを超えない事とされており、風景明媚な景色を堪能しながらゆっくり、のんびりと走ることを求められていたのだと思われ。実際は平地で時速20～25km下り坂でも時速40km程でした。急な坂はスイッチバックで登って行くため、乗客が降りて用をたして走ってまた乗る姿が見られました。たびたび脱線したが、乗客も手伝って線路を動かして5分程で修復し、何事なかったように定刻で到着したそうです。自動車の普及、吾妻線の開通、台風による2度にわたる吾妻川橋脚の流失等で草軽電車は存続が困難となり、昭和34年(1959年)新軽井沢～上州三原間の廃止、昭和36年に上州三原～草津温泉間の廃止が決定され、翌昭和37年に全線の撤去が完了しその役割を終えました。



【旧草軽電鉄跡地散策ジョウター】～参加者募集～



- ◆「草軽電鉄の跡地をジオガイドの案内で散策してみませんか? 当時の半の跡を歩きながら歩くことができるまじないチャンスです。草軽電鉄が古くて何が何だか、何が何だかだったのか、この道では語りきれなかったものもたくさん聞かせることができます!
- ◆日付: 4月27日(土)
- ◆時間: 9時～12時(集合は30分前)
- ◆集合場所: 北軽井沢観光協会
- ◆人数: 50名
- ◆参加費: 1,000円
- ◆申込み: 要室下駅、浅間山ジオパーク推進協議会事務局まで

写真提供: 草軽電鉄

写真提供: 浅間山